

チェルノブイリ通信

発行 チェルノブイリ支援運動・九州事務局
連絡先 北九州市八幡東区春の町1-3-7 日開荘2号
Tel・Fax 093(681)1780

口座番号 福岡7-65328
加入者名 チェルノブイリ支援運動・九州

1995年1月21日

No.

28



Совету Министров Республики Беларусь,
исполкомам Советов всех уровней

НА ТРЕЗВЫЙ РАЗУМ

チェルノブイリ通信No.28号を お届けします

新しい年、1995年を迎えました。今年も「チェルノブイリ支援運動・九州」をよろしくお願いいたします。さて、今回の通信の内容は…

- 昨年11月の総会報告
- 昨年度の会計報告
- 現地の子どもたちの作文集について
- 事務局スタッフ、顧問から年頭のあいさつ
- チェルノブイリ支援コーヒーのこと
- 会計監査(会計アドバイザー)募集…などとなっています。

第5回総会は予定通り11月13日(日)、北九州市立商工貿易会館で開催されました。所狭しと並べられた写真パネルの出来上がりは上々で、どこに出しても恥ずかしくない資料になると思われました。総会に先立ち、京都大学原子炉実験所の今中哲二さんに記念講演をしていただきました。前号の案内では、ミンスクで開かれた国際シンポジウムの報告ということになっていましたが、『専門的すぎてたぶんおもしろくないでしょう。』ということで急遽変更になりました。話の内容としては、「ベラルーシという国、ある

いは人と付き合うには」という、これまで今中さんが経験してきたことを通して感じた、さまざまな文化や民俗性の違いに戸惑いながらも、どういう付き合いをしていったらいいのかというものでした。この点は、わたしたちとしてもさまざまな経験をしていますので、笑うに笑えないところも多々ありますが、最近では、かなり克服してきましたと思います。作文集出版にあたってのベラルーシ側の対応の早さなどは、目を見張るものがあり、お互いの関係は今後ますます良好になってくると思います。

講演に引き続き総会に入りました。会場の関係もあり午後6時までの約2時間15分の総会でしたが、今期から事務局を補佐していただくことになった、各アドバイザーの方々も出席していただき、それぞれの専門的な立場からの発言等もあり、内容のある総会となりました。また、総会終了後、場所を変えての交流会も行い、楽しいひとときを過ごすことができ、今年1年の励みともなりました。

以下、総会議案と決議事項についての報告となります。

チェルノブイリ支援運動・九州 第5回総会

活動報告

(1993年12月～1994年1月)

1, 第4次調査団の派遣

①6月8日～17日の日程で第4次調査団を派遣。

サナトリウム・九州、ミンスク第一病院小児血液病センター、放射線医学センター付属病院、モズイリ市子ども病院、ナローブリャ地区病院など医療の現状を調査、モズイリ市第13中学校を訪問。新しい教育システム「エコポリス・文化・健康」を参観、汚染ゾーンの視察などを行なう。

②サナトリウム・九州の現状

★ 1クール24日間の療養、入所の定員、人員の選定は教育期間と協力しておこなっている。(費用はその地区の労働組合や企業が必要経費の半分を保証する)

★ これまでの経験から1グループには同じ年齢の子どもだけの方がいい。

★ 選考基準は一つ。汚染地区に居住している子ども達か、ゾーンからの移住者であること。

★ 特別待遇処置は、健康回復が思わしくないもの、長期間、健康回復ができていないものと、衰弱している子どもとその母親に与えられる。

(サナトリウムに来た子どもで、弱っている子ども、病気の子どものみをカルテにチェックしているので、来年、その子ども達に入所許可があたえられることになっているという)

★ 今年度、サナトリウムに入所した子どもの内訳は、1月-119人、2月-100人、3月-198人、4月-96人、5月-127人、6月-112人、7月-159人、8月-109人、9月はボイラーの修理のために子ども達を受け入れることができず、10月から再開する。

★ 今年受け入れた子ども達の出身地区は、ベテコフ、ナローブリャ、ブラーギンチェルクス、コルミヤンスクの各地区(これは全てゴメリ州です。)と移住してきた子ども達。

★ これにかかった経費は、12億6200万ルーブル。ドル換算では、9万2012ドル。一人当たりの1クルールの経費は90.2ドルになる。(時期によって変動がある。たとえば、7-8月は97-96ドルであった。)この内、支援運動・九州からの支援金は3万9300ドルが使

われた。約43%になる。

★ サナトリウムの開所当初よりの希望であったマイクロバスをドイツで購入する予定。車の値段は3000ドル。

★ 保養の効果についての調査結果が発表された。

「ベラルーシ国内の他の療養、およびサナトリウム施設と、サナトリウム・九州の子ども達の健康回復の状況の比較分析では、サナトリウム・九州が、健康回復の面で、このデータが予備的なものとはいえ、より肯定的な効果を得ていることを指摘することができる。」

(ベラルーシ保健省、ルイシ)

③医療の現状

物価の問題も含めて、ますます厳しくなっている。高価な医療機器はもちろんだが、日本では簡単に手に入るビタミン剤、鉄剤、抗生物質、手術用の糸や手袋なども入手困難になっている。ベビーフードなども商店に数えるぐらいしか在庫がなく、厳しい配給制になっていた。(通信26号、柳楽先生の報告参照)

2, 医療研修の実施

6月17日に来日して7月18日に帰国という、約1ヵ月間の日程で医療研修を実施。研修生はモズイリ市子ども病院の小児科医、ガリーナ

・チェルヌイシェバさん。研修にかかった費用77万9千円を通販生活「チェルノブイリ母子基金」よりカンパしていただきました。

3, 通信の発行

1月18日 (No.23号)	2100部
3月18日 (No.24号)	2100部
4月 末日 (No.24号)	1200部
増刷発行…Gコープ新規会員送付	
5月20日 (No.25号)	2100部
8月11日 (No.26号)	3000部
10月24日 (No.27号)	2000部

4, チラシ、パネルの作成

●サナトリウムの状況をより分かりやすく紹介した写真入り多色刷りのチラシを一万枚作成。送付。

●4次にわたる調査団が撮影してきたチェルノブイリの今伝える貴重なフィルムを引き伸ばし、約90枚パネルにしました。どしどし、利用してください。

5, 支援物資

6月

「サナトリウム・九州」に運営費5万ドル、エコーコピー 1セット、エコーセンサー3・5MHZ 1セット、エコーペーパー 1BOX、エコーゼリー 1BOX、COBA

S READY用遠心機、総合ビタミン剤10kgを贈呈。モズイリ市子ども病院にエコーカメラSSD500 1セット、エコーゼリー 1BOX、総合ビタミン剤10kgを贈呈。

7月

エコーコピー 1セット、エコーペーパー 1BOX、エコーゼリー 1BOX ガリーナさんを通してモズイリ市子ども病院へ贈呈。

9月

松本小児科より心電計1台寄贈 来年度持参することになります。

6. 支援運動・九州の組織実態

●登録会員数1947名中 今期の入金1084名

サナトリウム運営基金…234名

医療援助基金 …869名

カンパ …150名

●連絡窓口 24カ所

活動の提案

(1994年12月～1995年11月)

- 1, チェルノブイリの子ども達の作文集の発行
- 2, チェルノブイリ同盟の講演会
- 3, 第5次調査団の派遣
- 4, サナトリウムの運営について
- 5, 組織体制、運営の充実について

支援運動の活動規模、扱う金額等大きくなるにつれて、その事務処理すらボランティア的活動の限界を示したのが昨年でした。今期、事務所を構え、専従の事務局員を置き、迅速な事務処理に勤めました。

そして、医療研修の反省から、事務局をカバーする体制の必要性を痛感しました。そこで、支援運動を支えていただく専門家の参加をお願いし、快諾をいただいています。顧問、もしくは「友人」ということでお願いしています。

◆医療顧問

柳桑翼さん(大分協和病院)

松本常國さん(松本小児科医院)

◆翻訳顧問

菊川憲司さん

◆アドバイザー

今中哲二さん(京都大学原子炉実験所)

◆会計監査

募集する

6. サナトリウム運営基金について

て

(後述)

7. 規約改訂

(別紙)

協議事項

○ 活動報告では、ベラルーシからのサナトリウムの運営についての報告内

客としては、子ども達の地域・名前だけでなく、サナトリウムでの検査の結果や療養の結果を具体的・個別的に報告してもらおう。ヤコベンコさんからのFAXの中で、「サナトリウムの評価が高まっている」と言っているが、その具体的な根拠やサナトリウムでの食事の内容や子ども達の日課など、親近感が湧くようなものもデータとして送ってもらおうようにしたらどうか、などの意見が出されました。

○ 支援物資としては調査団の派遣とあわせて、モノを持っていくのに料金的に厳しくなっているので、モスクワでの調達を検討してみる。医療の現状ということでは、ますます厳しくなっており、基本的な薬やベビーフードなども持っていったらどうか、などの意見が出されました。

○ 支援運動結成から5年が経過しており、名簿会員は膨れる一方の状況ですが、ここ2、3年何の音さたもない人をどうするか、ということについては事務局預かりとなりました。そこで、引き続き通信等必要な方はぜひともご連絡をいただきたいと思っています。その上で何の連絡もない方につきましては事務局の方で整理させていただきたいと思っています。

○ 今年度の活動方針ということでは、上半期のメインとして「子ども達の作文集の発行」とそれに合わせて子ども

達を日本に招待し、各地での出版記念の報告会の開催。下半期では、第5次調査団の派遣ということになります。作文集の出版については、すでにプロジェクトをつくり作業を進めていますが、ものすごい反響が届いており、期待に敗けない作品を作りたいと思っています。

○ 作文を書いた子ども達を4人（男女2人づつ）日本に招待し、サナトリウムの報告と子ども達の報告を合わせたの各地での出版記念講演会を計画したいと思います。受け入れ可能な地区・人は事務局まで連絡ください。



サナトリウム運営基金が変わります。当初サナトリウムに入所する一人の子どもの1年間の費用を里親として面倒見ていこうということで出発しましたが、その後「1年間の保養から1ヵ月保養」へと変わったことから、里親ということではなくサナトリウム運営のための基金ということでご協力いただきました。しかし、「この金額は大きすぎるのではないか」という意見もあり、総会でどうするかを検討しました。「サナトリウムで保養するために必要な経費はいま一人1ヵ月90ドル前後である」「できるだけ多くの人が関わりやすい金額に」ということ

で、これまでの「年間1口・4万2千円」から「年間1口・1万円」ということになりました。

医療援助基金はこれまで通りです。

【サナトリウム運営基金】

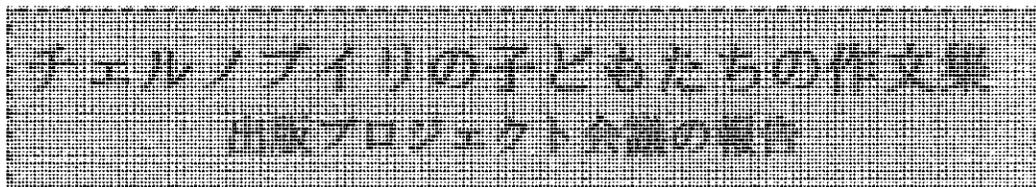
サナトリウムを運営する経費になります。

一口 一万円（何口でも可）

【チェルノブイリ医療援助基金】
放射能で汚染している地域に住む人達に医療機器・薬・汚染されていない食物を提供するために使われます。

一口 二千元（何口でも可）

尚、4月1日以降、新規スタートとなります。



昨年12月3日、13日に出版プロジェクト会議が開かれ、細かい内容が話し合われました。以下、決定事項をお知らせします。

※自費出版とし、約250ページ、価格は1200円位とする。

※現地のをそのまま訳して本にすると、ページ数も多くなり、価格も高くなるので、約半分に削る。

※内容は、

- 1, チェルノブイリ同盟から日本へのあいさつ文。
- 2, 解説（初めてチェルノブイリに接する人にもわかるような事故のあらまし。作家の松下竜一さんをお願いします。）

3, 子どもの作文（約50編）

4, あとがき（支援運動の紹介。

事務局長 深江が担当）

5, その他（地図、放射能について等）

● 今後のスケジュールについて

※第二回出版プロジェクト会議を、1月28日（土）午後2時より小倉北中央公民館にて行います。どなたでも参加できます。（会議の後には、ささやかながら支援運動・九州の新年会を予定しています。出席される方はご連絡ください。また、同日同場所で、午後1時より定例の事務局

会議を行います。こちらの方ものぞいてみてください。)

※5月連休あけには、出版・販売を開始。

※6月に、作文を書いた現地の子どもたち4名を招待。

プロジェクト会議に参加できない方でも、ご意見や提案などをお持ちの方は、事務所まで遠慮無く連絡してください。

ただ今、予約受け付け中

チェルノブイリの子どもたちの作文集

“灰が降り積もった春(原題)”

・1200円(予価)

送料については後日連絡します。

★題名・定価は変更の可能性があります。

予約の連絡をいただいた方には後日、本の案内・振り替え用紙を送ります。

申込みは、支援運動・九州事務局まで

作品を選ぶ作業に加わってほしい」と編集協力者を募ったため、当日から申し込み、問い合わせが相次ぎました。

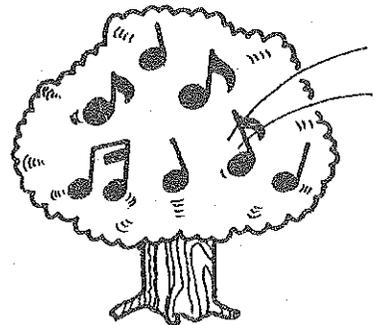
1月20日現在、記事を読んできた電話は78件。最も多かった年代は、高校生の37件(うち女子33件、男子4件)でした。

事務局は、作文の原稿も刷り増しに次ぐ刷り増しで、正月気分も一気にさめ、うれしい悲鳴をあげました。個人の問い合わせ以外では、出版社、授業で取り上げたいという教師、追跡取材ができないだろうかというテレビ局等々。そして、超有名絵本作家から表紙・挿し絵をボランティアで…という申し出があった時には、思わず飛び上がってしまいました。

この作文の原稿ですが、まだ少しあります。読んでみたい方は連絡してください。送れば送ります。

朝日新聞の記事に 中・高生からの電話が殺到!

九州・山口・関東・東北・北海道等の朝日新聞で、この作文集のことを大きく取り上げていただきました。記事の中に、「作文を書いた子と同年代の、中学、高校生に作文を読んでもらい、



チェルノブイリ支援 コーヒーのご案内

中村 隆市

チェルノブイリ支援運動が1990年6月に結成されてから半年程して、支援運動の活動資金づくりを目的として、無農薬コーヒー（チェルノブイリ支援コーヒー）の物販活動を始めました。収益金がチェルノブイリへのカンパになるというだけでなく、コーヒー自体が無農薬栽培で安心して飲めること、味がソフトで飲みやすいということで、販売量が年毎に増えてきました。94年の収益金（支援運動へのカンパ）は約140万円でした。しかし、この支援コーヒーのことは、4年前に1回だけ通信に載せただけでしたので、もっとPRしようということになりました。

チェルノブイリ支援コーヒーの現在の主要生産農場であるジャカラダ農場には（有）有機コーヒーのサンパウロ事務所スタッフが毎月訪問するだけでなく、日本からも毎年訪問して栽培内容（堆肥の内容や豆科作物の間作など）などを協議したり、チェルノブイリ支援運動の活動報告もしています。

農場主のカルロスさんは、自分のコーヒーがチェルノブイリ支援のために役立っていることをとても喜んでいきます。年間の農場での栽培風景やカルロ

スさんのメッセージ等を来月中に、ビデオにまとめる予定です。ご覧になりたい方は、〈チェルノブイリ友の会〉まで、ご連絡ください。

ブラジルの有機農業協会によって認定された無農薬コーヒー生産は、（有）有機コーヒーによって直輸入され、焙煎されます。200gアルミパック入で鮮度保持剤が入っているため賞味期限は12ヵ月あります。1パックの小売価格は700円ですが10パック以上の注文ですと、送料が無料になります。カンパの額は数量によって変わりますが、例えば10パックを7000円で購入されますと自動的に1750円が支援運動へカンパとして入ります。個人で購入される方と別に、生協等のように多量に販売協力していただける所には、割引価格で卸している所もあります。

詳しくは〈チェルノブイリ友の会〉までお尋ねください。

連絡先

《チェルノブイリ友の会》

〒807

福岡県遠賀郡水巻町下二西

3-7-16

（有）有機コーヒー内

093-202-0068

093-201-8398

事務局・顧問からの 年頭のメッセージです

新年おめでとうございます。昨年のベラルーシ・チェルノブイリ調査は貴重な体験となりました。「人間は原発と共存できない」という考え方がありますが、同様に「石油や自動車とも共存できない」と言うべきでしょう。今年も微力をつくしたいと思います。

医療顧問 大分協和病院
なぎら つよし

今年は、事故から数えて、もう10年目になります。現地では危機的な状況が続いています。子どもたちの作文集を多くの人に読んでいただき、支援の輪が広がるようになるといいですね。

翻訳担当 菊川 憲司

「支援運動・九州」も設立から5年を数え、わたしも5歳年をとり、いよいよ20代最後の年を迎えました。運動を通して知り合ったすてきな人たちを、心の中で尊敬しつつ今年もがんばります。どうぞよろしくお願いします。

事務局 姉川 美和子

事務局がオープンして1年、何とかつぶれずヨカッタヨカッタ。去年は地道にチェルノブイリ支援、反原発運動を続ける人達と出会えて、私にとって

は有意義な年でした(FさんPTさんにとってゲータラな専従つき合ひの1年だったでしょう)。今年が一番忙しい時期に出産だって。ワハハ。今年もヨロシク。作文集もよろしく。

事務局専従 大倉 純子

支援運動・九州創立以来の事務局員ではありながら、ただ後ろの方にくっついていただけでした。しかし辺りをウロウロしていたおかげで、様々な貴重な教えを得させてもらったように思います。今後もよろしくお願いします。

事務局

福岡市37才H.F

今年はセールスマンに徹しようと思っています。ノルマは300冊、目標は500冊売ることです。もちろん売れるものは〈チェルノブイリの子どもたちの作文集〉です。ナマケモノの私をそんな気にさせる作文集です。

事務局 中村 隆市

新年早々、事務所の電話は鳴りっぱなしです。「私も作文集のお手伝いをさせてください」という中・高生たちのフレッシュなエネルギーに若返るような気分です。出版やら、現地の子どもの来日やらで、てんてこまいの一年になりそうですが、作文集が飛ぶように売れていく光景を想像しながら、お仕事(ひたすら作業)に励みたいと思っています。

事務局 鶴田 かず美

「継続は力なり」と言いますが、まさに一つ一つの積み重ねが、大きな力となっているのが支援運動かな、と最近とみに思うわけです。始めた頃は、マスコミなんかの取材に対して、『1年や2年で終わる運動じゃない』と一応答えていましたが、まさかここまで大きな運動になるとは思ってもいませんでした。「人の噂も七五日」といいますが、なんでもすぐに忘れてしまう日本人には、チェルノブイリも「アッ」という間に忘れられてしまうのではな

いかと思っていた次第です。ところが、事故のことなどほとんど知らないはずの中高生が、新聞記事を読んだだけで、自分から電話をかけてくるんです。

『お手伝いをしたいんですけど、どうすればいいんですか?』。

思わず涙がこぼれてきそうなささやきです。

私は確信しました。日本の未来もまだまだ捨てたもんじゃない、と。

というわけで、今年も頑張ろう。

事務局長 深江 守



会計顧問を募集

チェルノブイリ支援運動・九州では、北九州近辺にお住まいの方、または、月1回ほど北九州に出てこれる方で、会計に関することをボランティアでやったださる方を募集しています。

会計監査の他に、会計全般についてのアドバイスをしていただきたいと希望しています。資格等は特に問いませんが、簿記の解る方が望ましいです。

翻訳ボランティアを募集

今までは、ロシア語の通訳を菊川さんに一任してきたのですが、会の活動が広がるにつれて他にも協力して下さる方が必要になってきました。実力に応じて、現地から送られてきた手紙

・FAX・新聞等の翻訳、また、現地の人たちが来日した時の通訳などをお願いすることになります。謝礼はその都度相談の上、決定します。

ナターリア・ネビンナヤ（女）
第1中学校10年生
ルニンネツ町

だいふ前に、ヒロシマ、ナガサキのことを聞いたことがある。人が影だけを残して死に、人が原爆の地獄の灼熱の中でひどく苦しみ生きながら死んでいった。私は頭の中では分かっていたが、本当には理解してはいなかった。日本人の苦痛はどこか遠いところの他人の話と思っていた。「ヒロシマがここでなくて良かった」と、私は考えていた。それが実際にここで、起こってしまった。

私は8歳だった。子供だからもちろん何も理解できなかった。なぜクラス全員ピオネールキャンプに行かされるのか。なぜ大人はこんなに驚いているのか。なぜ母親たちがないているのか。私たちにとっては物珍しく、楽しいものだった。親たちは手紙で果物や野菜を食べてはいけない、いちごやきのこを採ってはいけないと書いてきた。すこしは驚いたが、恐怖はまったくなかった。私たちは「チェルノブイリ」の意味でさえも理解できなかった。

花が咲き乱れていた土地はニガヨモギで覆われてしまった。原子力発電所

での誰かの過ちによって引き起こされた事故で、すばらしく天気がよかった朝に一瞬にしてすべてが変わってしまった。真っ黒な風が、奇麗な青い目をしたベラルーシに、被害と苦痛を運びばらまいてしまった。全地球は凍りつき、揺るがされた。時間は止まってしまった。私たちは何にも知らなかった。それを分かるようになったのは、ずいぶんたってからだった。それからは、被曝した子供たちはキャンプに送られ、村ごと引っ越しをさせられた。私たちは疲れ切ってしまった。

補償。現在、学校の給食は無料。企業ではサナトリウム行きの費用は無料。私の両親は給料以外に手当をもらっている。これらは少しでも状況を良くするのだろうか。子供が授業中に気絶するのがなくなるのだろうか。人々が白血病で死ななくなるのだろうか。私たちの甲状腺は元どおりになるとでもいうのだろうか。

今、知恵を手に入れよう。医者が人の生命を救おうと努力しても、国家がいろいろな補償を与えようとも、私たちのチェルノブイリの刻印は消えはしない。サナトリウムに行ったとしても、

家に帰ってくるから同じだ。私たちはこの土地に住み、ここでできる果実を食べる。どうしようもない。私たちはみんなガンの恐怖におびえている。私たちは長期間おびえることになる。私たちだけでなく。子も、孫も、ひ孫もだ。

恐ろしいことだ。新聞は、私たちの体の状態についてさまざまな事実や数字をならべて警告している。すべての種類の異常、白血病、甲状腺肥大、私たちの体内で常に起こっている変化。私たちは自分のため、知人や大切な人のために闘っているのだ。

だが私たちを脅かすのは少なくはないのだ。私たちのゆがんだ魂。心の深い病。

このような厳しい時にも、私たちは孤立しているわけではない。世界中の人々が私たちに救いの手をさしのべてくれている。親切な、心のやさしい人々が、他人の不幸を理解してくれ、見知らぬ人に同情を寄せるのは、もちろんいいことだ。慰めや痛みをわかちあう言葉は、私たちを元気づける。彼らは人道的援助や必要な機器を国に送ってくれている。それに対して、厚かましくなったり、わがままになったりするのを認めようとしない。自分の傷を見せびらかし、自分がしでかした過ちの賠償を世界に要求しているのだ。私たちはいろんな国からくる贈り物に慣れてしまっている。仕事も忘れていた。資本主義世界からの援助をあてにしてしまっている。

私たちの社会は、かよわいひな鳥にそっくりだ。大きく口をあげ、やしなう義務のある母鳥を待っているのだ。全力を仕事にかたむけるかわりに、自らの欠陥を直すかわりに、他の国々と同じ水準に引き上げるかわりに、私たちは全員、欠陥だらけの、不秩序の沼に深く深く陥りつつある。援助はただの援助である。他人の体に永久に寄生虫として生き延びることは出来ない。自分自身の悲劇を売り物にしてはいけない。これを認識し、理解しないうちは、私たちは文明的な人々のように生きることが出来ない。もちろん、私たちは彼らとは違う。私たちは目に見えない壁にかこまれている。国民の多数がニガヨモギを背負っているからだ。だが、このことを通りで大声で叫ぶ必要はない。わが民族には悲劇を見せびらかすような習慣はない。私たちは自分の運命に慣れて、生きていく。これはうそだ。変えることができないから、だから、だまって苦しんでいるのだ。しかし、心のどこか奥深く冷たい絶望感がふるえている。そして、それが上にはいあがろうとすると、私たちは空にむかって目をあげ、たずねる。「何のために」。答えはない。

私はある女の人の話を思い出す。彼女が仕事から家に帰ると、幼い、まだ赤ちゃんの息子が母親に頼んだ。「ママ、キエフに連れてって。教会の鐘を見たい。死ぬ前に」と。

「赤子の口は真理を話す」という格言を思い起こす。全社会が、数千人が

チェルノブイリの十字架にはりつけになり、数百万人は毒殺されるという最期を、解決の方法も探さず、死を待っているというのだろうか。

正しくない。生きるべきだ。

計画を立て、よくなることを期待しようではないか。このような状況に屈しない人々がいる。科学者は、危険を覚悟で、環境を安全にするための技術を開発し、科学を人間に奉仕させるために努力している。医者は、必要な機器はなくても、被害者一人一人の命を救おうとしている。私たちはこの人達を模範にして、未来のため、私たちの子供のため、私たちの土地を安全なものにしなければならない。

現実社会は、私たちにきびしい教訓

を与えた。それぞれがこの教訓から学ぶべきことは、何が大切なことかを分かり、われわれは自分自身の運命の所有者であり、われわれは自分自身の生命の所有者であり、地球の所有者であることを理解することである。遅くならない前に、行動しよう。われわれの中の苦痛が無気力や無関心になってしまわないようにしよう。誰も、再びこのような苦痛をこうむらないよう行動しよう。この地球の人間と自然に害毒を流さないよう努力しよう。私たちのすばらしい地球を、香気とニガヨモギだけがただよう生命のない無限の砂漠に変えたくない。

小麦の種をまくのが夢だ

アリヨーシャ・ヒリコ（男）

ジリチ村

キーロフ地区

不幸は、巨大な鳥のように、黒い翼をこの土地のうえに広げ、次々に犠牲者をさがしだしている。僕は新聞を読んだり、テレビを見たりして、また、母や祖母や先生からチェルノブイリの災難の話聞く。

ここジリチはとても美しいところである。ここには地主のブルゴックの名

前や17世紀の建造物も残っている。菩提樹の古木や、堂々としたカシの木や、魔法使いのようなかえでの木の並木道が、村を取り囲んでいる。ソホーズの公園には、木の葉が音を立てている。そこには春になると、白色やピンクの花が咲き乱れ、いい香りでいっぱいになる。その香りは人々を喜ばせ、楽しませる。夏はもっと美しい。村のそばのドバスナ川はやさしくさらさらと流れている。僕はその川の少し冷たい水で泳ぎ、日光浴をし、川辺で友達

を遊ぶのが大好きだ。特に、イワン・クパーラ祭の日はとても楽しい。草原には大きなたき火がたかれ、少女たちは川に花束を投げ込み、年とった女性たちは心のこもった歌をうたう。僕には父、母、たくさんの兄弟がいる。僕はみんな好きです。一番下の妹のレーナが生まれたのは1993年の夏だった。彼女はとても可愛かった。僕はレーナと遊び、彼女の子守をよくした。だが、レーナは死んだ。まだ生後5カ月だった。

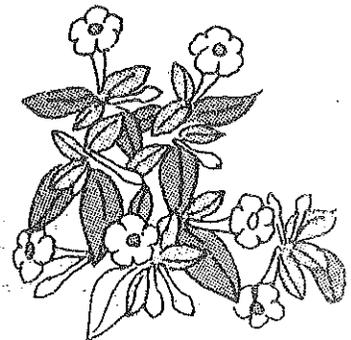
子供が5人になってしまった。そして僕の家不幸が居着いてしまった。父と一番上の兄が病気になってしまった。母が苦しみ、僕たちに涙を見せないようにしているのをみると、僕はたまらなくなる。母は穏やかで、優しく、はたらきものだった。以前は生活をよるこび、いつも冗談ばかり言っていた。

僕の家庭の不幸の原因はチェルノブイリである。レーナの病気は脳水腫だった。ポブルイスクの病院で診断された。レーナのために小さな墓をつくり、そのそばに、もみの木を植えた。僕たちはよくそこへ行き、僕たちが、彼女の事で苦しみ、彼女をいかに愛しているかを話す。

最近、僕の学校で医療検診が行われた。僕も検診を受け、そのとき、僕に甲状腺の病気があると言われた。モギリヨフの病院に医療相談を受けに行かされた。そこで診断がくだされ、僕のは甲状腺肥大の第2期だった。僕の友達の何人かは第3期だった。僕はよく

頭痛がする。視力も悪くなり、眼鏡をかけることになった。僕たちに、放射能の影響を低くするために、くるみ、オレンジ、バナナや海のそばでとれる果物をとるよう言われる。そんなものをどこで手に入れられるのか。

2年前、僕たちのクラスは療養のためにクリミヤに行った。僕は喜んだ。力がよみがえったように感じた。現在、そこには行けない。お金がないそうだ。いろんな困難がることは分かる。ただ一つ理解できないのは、なぜ子供だけが苦しまなければいけないのかだ。僕は生きて、学校を卒業したら、ソホーズの技術学校に入りたいと考えている。そこには僕の2人の兄が学んでいる。僕はこの病んだ大地を治療し、そこに小麦の種を蒔くこと夢見ている。僕は社会に必要な人物になり、苦悩するベラルーシのために働きたいと思っている。僕の夢は実現するだろうか。



チェルノブイリ支援運動・九州 規約改訂

1994, 11, 13

一、会の名称

会の名称を「チェルノブイリ支援運動・九州」とする。

二、事務所

北九州市八幡東区春の町1丁目3-7日開荘2号(TEL/FAX093-681-1780)に事務所を置く。必要に応じ専従事務局員を置く。

三、各地窓口

九州・山口各地に連絡窓口を設ける

四、会の活動と目的

チェルノブイリ原発事故の被害にあった人々、とくに子ども達を一人でも多く救うための活動を行う。ベラルーシ共和国ミンスクにある「サナトリウム・九州」の運営資金の援助や、同国にある子ども病院その他の医療機関に医療機器を送る活動はその主なものである。その為に基金を設立し募金を募る。このうち二割以下を会の運営に充てる。

五、会員

国籍、性別、年齢などに関係なくだれでも募金することにより会員となる。ただし期間は一年とする。

会員の内、数人の事務局員が会計、名簿の管理、情報収集、各地との連絡、通信の発行等実務を担当する。

医療顧問、翻訳・通訳顧問を設け、専門的なことに関する相談に乗ってもらう。別に監査人を設け、募金の監査を行う。

六、事務局会議

日常的な業務は月一回の事務局会議で決定、確認する。事務局会議の内容は各窓口
に連絡する。

七、総会

年一回、総会を開き、活動報告、決算報告、予算の承認、重大事項の決定を行う。

八、当面の活動

- ①サナトリウムの運営について、現地から報告を受ける。
- ②チェルノブイリ通信を発行し、会員に現地の状況を知らせる。
- ③調査団派遣、現地救援団体との連絡により、情報収集をする。
- ④チラシ、パンフレット、各種イベントなどでチェルノブイリ被害救済を広く呼びかけ、募金を集める。
- ⑤その他、状況に応じた活動を行う。